



カサンドラ

エレガントさと独特なシマ模様が魅力の力強いトラは、いつも大森山動物園のスター的存在です。寅年特集として、スタッフがいろいろな切り口でご紹介します。飼育展示継続は、大きな意味でトラという動物の種の保存にも寄与し、また動物理解などにもつながってきたものと思います。

園長補佐 三浦 匡哉

当園では、1973年の開園当初からベルガルトラを飼育していましたが、2003年からは猛獣舎「王者の森」の完成を機に、公益社団法人日本動物園水族館協会（JAZA）が種の保存に力を入れているアムールトラの飼育展示に向け準備を始めました。アムールトラはシベリアや中国東北部に生息する動物なので、比較的秋田の気候に慣れやすいということもありました。

2004年にベンガルトラの寅次郎が亡くなり、翌年アムールトラのウィッキーが来園しました<sup>(1)</sup>。その翌年、ベンガルトラのマドンナが亡くなったため、2007年にアシリを導入し、アムールトラの繁殖に本格的に取り組む準備が整いました。

担当者の努力や苦勞の甲斐もあり、2008年3月に初めて繁殖しました<sup>(2)</sup>。それがアルルとミルルです。2頭はすくすく育ち、大人のトラ1頭用の寝室に親子が収まらないのではと心配していましたが、そのタイミングでアルルにパートナーが見つかり、2009年6月に広島市安佐動物公園に、ミルルも2011年3月に福山市立動物園に旅立ちました。

ウィッキーとアシリの間でもう1度繁殖に挑もうとしましたが、ミルルが旅立ってから3か月後に残念ながらウィッキーが亡くなってしまいました<sup>(3)</sup>。

同じ年の2011年秋にはアシリの孫にあたるヒロシとアサコが安佐動物公園からやってきました<sup>(4)</sup>。アサコについては、管理計画により、和歌山県のアドベンチャーワールドへ翌年6月に移動しています<sup>(5)</sup>。

2015年5月にアシリが亡くなった後<sup>(6)</sup>、ヒロシのパートナーとして2016年3月にロシアからカサンドラがやっ

てきた<sup>(7)</sup>。アルルとミルルの誕生からすでに8年が経過し、久々の繁殖への取り組みだったため、準備を整えて慎重に見合い、同居を行いました<sup>(8)</sup>。その後カサンドラの発情のタイミングに合わせて同居を重ね、2019年2月に初めて出産にこぎ着けましたが、初めてのお産で不慣れなこともあり、残念ながら生まれた子どもは全て死んでしまいました<sup>(9)</sup>。3か月ほど間を空けてから次の繁殖に向けて同居を行いました。念願がかない同年9月29日、11年ぶりに4つ子が生まれたのです。カサンドラは献身的に子育てを行い、子どもはすくすくと順調に成長していきました<sup>(10)</sup>。4頭はそれぞれ令和の元号に由来の令、和、風、月と名付けられ、人気者になりました。

アムールトラ管理計画により、2020年6月にヒロシと月<sup>(11)</sup>が、2021年3月には、和と風<sup>(12)</sup>がそれぞれ繁殖を目的に他園へ旅立ちました。

アムールトラという種を日本国内で維持していくために、残った令もいずれ他の動物園に旅立つでしょう。カサンドラには次のパートナーとの間で新たな命を産み、育ててもらうことを期待しています。

さらに詳しく知りたいかたは、コミュニケーションのバックナンバーでご覧いただけます♪

\* ( ) = 発行号

(1) = No.69、(2) = No.76,78、(3) = No.82、(4) = No.83、(5) = No.84、(6) = No.90、(7) = No.92、(8) = No.95、(9) = No.98、(10) = No.99、(11) = No.100、(12) = No.102

# 大森山アムールトラ家系図

大森山で飼育してきたアムールトラの家系図です。動物園のアムールトラは、1頭1頭がその血統を登録されています。登録された血統をもとに国内のトラが血統に偏りなく命をつないでいけるよう繁殖計画が立てられています。



★今後、この家系図が先につながっていくのが楽しみです ☺

# 歴代飼育員から

これまでアムールトラの飼育を担当してきた歴代の飼育員に、思い出深い出来事などを聞きました。

## 2007年～2008年担当

飼育展示担当 宇佐美 均

2007年6月、多摩動物公園からアシリが大森山にやってきました。ウィッキーとペアになってもらうため、同居に向けた日々の観察が始まりました。

通常、大型ネコ科の動物を新たに同居させる場合は、個体の安全確保を優先しながらメスの発情期に行います。アシリとウィッキーも同様で、アシリの発情期を見極めながら同居を行いました。2頭はとても相性が良く、じゃれ合ったり寄り添ったりする行動が多く見られました。その後、繁殖行動も見られたことから、妊娠を想定した準備を始めました。そして2008年3月、当園では初めてとなる赤ちゃんが誕生したのです。

これまで、当園の気候風土での管理や同居の時期、妊

娠の兆候・見極め、出産準備などは全く初めてだったため、経験豊富な動物園にしつこいくらい連絡し、さまざまなご教示をいただいたことを思い出します。アシリとウィッキーはその後天寿を全うしましたが、親子がいたときの賑やかな光景は今でも忘れません。ありがとうございます。



アシリ(左)とウィッキー

## 2007年～2021年担当

飼育展示担当 奥山 麻裕子

これまで11頭のアムールトラを担当しましたが、その中でも記憶に残っているのは、初めての担当動物であるオスのウィッキーです。体が大きく力強い眼光で、のしのと展示場を闊歩する迫力ある見た目とは違い、かなり温厚な性格のトラでした。もちろん、温厚な性格と言っ



温厚な性格のウィッキー

ても大型の肉食動物ですので、作業を一つ間違えると確実に大事故になります。毎日細心の注意を払い、緊張感を

持って飼育を行いました。

当初、私がイメージしていた猛獣は、「唸り声をあげ続けて人間を威嚇する獰猛な動物」でした。しかし実際に飼育してみると、同じネコ科のライオンと比べトラは穏やかな性格で、正しく飼育管理をしている限り人間に対して一方的に威嚇してくるということはありません。特にウィッキーは他のトラと比べてもかなりらかな性格で、怒った時の唸り声は亡くなるまで一度も聞いた事がありませんでした。動物のイメージにとらわれず、個体を正しく理解し飼育を行うことの重要性を教えてくれたウィッキーは、2008年にアシリとの繁殖も経験させてくれました。2019年には、ウィッキーのひ孫にあたる4つ子の繁殖にも成功し、オスの令を見ていると、ひ孫たちに彼の温厚な性格は確実に引き継がれていると感じています。

## 2021年5月～現在

飼育展示担当 佐々木 祐紀

アムールトラの担当になって約9か月が経ちました。以前の古い猛獣舎の時にベンガルトラの担当をしていましたが、現在の猛獣舎になり、アムールトラの飼育を開始してからトラの担当になったのは久々です。これまでも猛獣舎を含む班には属しており、担当が休んだときに、代番としてトラの飼育をすることは時々ありましたので、その経験を活かし日常の管理は問題なく行えました。

しかし、主担当となると話は別で、個体の健康管理のためにもエサの改善も含め、前担当とも話し合いながら、よりよい状態になるように努力することが必要となります。現在は、母親のカサンドラと2019年生まれのオスの令がいます。トラは本来、単独生活の動物のため、動物園でも

基本1頭のみでの展示となります。新たな展開としては、令を他園へ移動させ、カサンドラに新たな相手を迎えることが、アムールトラの種の保存に繋げるための今後の課題となります。



誕生日の令に馬肉をプレゼント

2003年以前は、トラなど猛獣を展示する施設は総合動物舎という名前で、1973年の開園当時の建物でした。当時の施設は猛獣を横並びに配置した長屋的なもので、新築工事に伴う解体直前には、ツキノワグマ、シンリンオオカミ、ヒョウ、ジャガー、ユキヒョウ、ライオン、トラ、チンパンジーを展示していました。

寝室は比較的広かったものの、展示場は昔ながらのコンクリートの床に鉄檻というスタイルで、幅6m、高さ3.5m、奥行き4m、動物の習性や運動などの健康面を考えると、面積・高さとも十分ではありませんでした。トラの展示場には当時の猛獣舎では数少ないプールが設置されていましたが、こちらもトラにとって快適なものかどうかは微妙なもの



以前の展示場(1973~2002年)

でした。

2003年に猛獣舎をリニューアルし、現在の「王者の森」が完成しました。展示場の広さは以前の約5倍で、土の上に竹などの植栽があり、プールも広々とした快適なものになりました。暑さが得意でないアムールトラは、夏にはプールに入って体を冷やしたり展示場の真ん中に設置した檜やぐらで、ゆっくりくつろいだりできます。

近年、動物福祉という言葉がよく聞かれるようになりました。「王者の森」は以前の「総合動物舎」に比べると、動物たちにとってだいぶ暮らしやすい施設だと思えます。今後はソフト面でも動物の生活の質を上げられるように、飼育担当者は工夫を重ねていきます。



現在の展示場「王者の森」(2003年~)

## アムールトラの飼育を取り巻く現状

獣医師 高橋 拓

2021年3月末現在、日本では24園館で55頭のアムールトラを飼育しています。アムールトラの血統管理は厳格で、国内の血統に偏りが無いように繁殖計画を立てなくてはなりません。日本動物園水族館協会(JAZA)では海外の動物園と協力して新しい血を日本に入れ、遺伝的多様性を保っています。当園でも計画管理のもと、2016年3月にロシアのノボシビルスク動物園から導入したメスのカサンドラは、無事に4頭の子を出産し育て上げ、国内の繁殖に貢献しました。体の大きなオスのヒロシとメスの割に体長のあるカサンドラの間に産まれた4頭の子どもは、とても体格に恵まれすくすくと育ちました。当園で生まれた子達が、全国の動物園でまた子孫を残し、その子達の成長を見ることを今から楽しみにしています。

これからの展望としては、カサンドラの相手となるオスの導入です。現在、国内複数の動物園で海外から導入した個体の遺伝子を残すためにペアリングを頑張っています。アムールトラの飼育園が増えると更なる繁殖が期待出来ますが、現状では難しいところです。

そのチャンスが来るまで、私たちが出来ることは飼育技術と繁殖技術の維持向上に努めていくことです。トラを長生きさせるために、ハズバンダリートレーニングを含めた更なる

健康管理方法を考え、動物の福祉のためにトラの飼育環境を整えて行きます。

大森山動物園は、アムールトラが生息している場所と同じように冬には雪が積もるため、野生に近い環境での姿が見られます。これは全国的にも珍しいことだと思しますので、ぜひご来園ください。



四つ子とカサンドラ(2020年1月撮影)